

思春期における不定愁訴症候群とライフスタイル変数の分布

○平山素子* 大澤清二* 下田敦子* 笠井直美**

(*大妻女大, **新潟大)

起立性調節障害(OD)の児童生徒が増加しライフスタイル変数との関係がしばしば議論されているが、臨床的な要請に応えることが急務であったこともあって、従来はODの陽性判定や諸症状の有無についての検討が優先されてきた。しかし陽性判定のボーダーラインやライフスタイル変数との相互関係を疫学的に探究する基礎としてそれらの分布特性を明らかにすることは不可欠である。

演者らは、昭和56年から現在の全国規模の標本データを蓄積してきた。このデータを使ってライフスタイル変数のうちから重要なものについて年齢・性別の分布の基礎的特徴を検討した。

それによれば起床時刻の学年差は比較的小さいが、歪度、尖度ともに正規性を保証しえない分布が得られている。

就寝時刻は学年が上がるに従い分布が遅い時間帯にずれている。小学生の分布と中学生の分布には時間的に1時間以上のずれが認められた。正規性はいずれの学年においても保証されず、低い尖度で、深夜まで拡大した扁平な分布形状になっている。

睡眠時間は学年が上がるに従って短縮するとともに分布範囲が拡大し低尖度になる。歪度は一部の学年では正規分布の範囲内にあるものもあるが、歪度・尖度の両方とも正規であったものはない。

OD陽性率は男子より女子で高く、学年が上がるに従って高頻度となる。

OD諸症状の有無によるOD得点では、学年が上がるに従い高くなり、分布範囲は広がっている。分布は著しく扁平で、しかも正に大きく歪んでいる。

以上の結果が得られているが口演ではさらに詳細な分布に関する検定結果について報告する。